

中央公論社

大岡昇平対談集

戦争と文学と

戦争と文学と 大岡昇平対談集

©1972 検印廃止

昭和47年11月15日印刷 昭和47年11月25日発行

定価 690 円

著者代表 大岡昇平

発行者 山越 豊

印刷者 山田 博

発行所 中央公論社 東京都中央区京橋 2 丁目 1 番地 振替東京34番

中央公論社刊

大岡昇平対談集 目次

野間 宏 戦争と文学

7

阿川弘之 つわものどもが夢の跡

27

いいだもも 転回期としての戦後

49

古山高麗雄 戦争体験と文学

107

大西巨人 戦争・文学・人間

155

古屋健三 『レイテ戦記』を語る

203

池島信平 戦争の傷痕

237

司馬遼太郎 日本人と軍隊と天皇

251

結城昌治 兵士と国家

283

戦争と文学と

大岡昇平対談集

野間

宏
* 戦争と文学

「人民文学」昭和二十八年八月号

『俘虜記』と『野火』

野間 『俘虜記』を読ましてもらって、僕自身整理できなかった点がいろいろ整理され、非常にありがたかったです、また逆にいうと整理され過ぎてるといふか、そういう点が感じられるんですが……。

大岡 それは、僕が成心をもってあの材料に臨んだからですね。成心をもって見れば、何を見てもあき盲も同然だというのはゲーテの言葉ですが、いっそそれをサブ・タイトルに使うかと思ったりくらいだったんです。最初自分のことだけ書いてるうちはそうでもなかったんですが、だんだんまわりの俘虜を書き出すと整理がつかなくなりました。

野間 その点、成心というか、それが出来上っているのでびっくりするんですが、それは戦争に行かれる前に戦争というものをかなり考えつくしたというか、考えようとしていたというか、そういう点が大分作用しているんじゃないですか。

大岡 そうですね。考えながら書いたのですが、結局は戦争中にあの戦争をどう考えていたかというところが決定していますね、割り切って考えていたわけですよ。

野間 造船所に勤めておられたんですか。船造りの状態からみて、必ず負ける、自分は必ず死ぬということを確認された場合があつたんですね。

大岡 ええそうです。僕は多少文学的な成心があつたんですが、普通の社会でもそういうふうに感じていました。

野間 『野火』の中でだつたと思うんですが、戦争を知らない人間は子供のようなものだ、ということがあるんですが、あれを見て僕もなるほどと思いました。兵隊になつてもまだ内地に在る間は余裕があるんですが、戦争に入ると人間のもちこたえられる最低限の限度をもまったく簡単に破る圧力がかかってくる。ところがはじめて戦争に行く人たちは、そんなことは知らないんですね。向うへ行きついて、戦闘がはじまつてはじめてそうだつたと思うが、もうそのときにはとりかえしがつかない。どう逃げようと思つても逃げられない。僕なんかはそういう感じがしたですね。

大岡 あんまりひどいことは、なんとなく来ないような気がするもんなんです。そして来てからでは間に合わない。もっとも僕自身は『俘虜記』に書いてあるように、一個中隊にも足りない兵力が、一方的に射たれて、潰滅したというだけですが。ミンドロ島は一個中隊で二十人残つた、これは率のいいほうですが、レイテ島は千人に五人残つているかどうか。——何しろ詳しい戦史がいつまでたつても発表されないのだからしかたがない。この頃やつと『大東亜戦争全史』が出だしましたが、相変らずの参謀文章で、中に引用されてる片仮名の公文書だけが信用出来るなんて、實際けしからんですね。

野間 そうですね、たしかに。僕も太平洋戦争の全貌、その真実を知りたいんですが、日本の兵隊というものは、じつに一局部しかわからないような位置にありますね。

大岡 それはどこの軍隊でも同じじゃないでしょうか。それが作戦というものでしょうからね。ただいつまでもごまかし切ってしまおうというのは、けしからんですよ。

日本の軍隊とアメリカの軍隊

野間 アメリカの軍隊と日本の軍隊の違いというか、それが『俘虜記』の中でいろいろ出てくる。また『裸者と死者』を読んでも日本の軍隊との違いはかなりわかるんですが、どういうふうに感じられますか。

大岡 アメリカの兵隊は装備にくっついた部分品という感じがですね。ほとんど人間という感じがしない。日本の軍隊は人間に負担をかけすぎていましたね。もっとも収容所のガードとか捕虜係——これはもう方々で戦争した揚句に閑職に廻されている兵隊で、割合ていねいだったですね。日本へ帰ってきて、進駐のアメリカの兵隊の程度の悪いのに驚いた。一つには、つまり戦争が終るところまでは割合いい兵隊がいたが、それが交替になって程度の悪い兵隊ばかりきたということもあったでしょう。兵隊はやっぱり戦争を沢山やったりつがいいですね。野間さんの『真空地帯』では染という兵隊もやっぱり一番ピンときて好きですね。ああいう型が割合多くいたからですね。しかし結局、問題は何のために戦争をするかということですね。日本兵がどうして大陸で

ああ乱暴になったかという、目的がはっきりしないからでしょう。これはアメリカの兵隊にいてもいえることで、かれらが日本に駐留しているのがいけないというのは、やっぱり目的がはっきりしないからです。

野間 非常に秩序が混乱しても、悪いことをしないでもちこたえられるという人間がいます。全然体力が弱っていて歩くのも面倒だからやらないというのもあるし、逆にいじめつけられるとか、あるいは苦しいとか、束縛されている、それに反抗する方向へどうしても爆発させていくとか、つまりいいかえると、兵隊を押えつける力——じつにこまかいことまで一つ一つ制限する。規則をつくったりしているわけですが、それが相当作用して、それに抵抗するというか、しかし真正面からは抵抗できないで悪いことをせずにじつとしているのは難しいんじゃないかという気がするんです。もちろん軍隊という機構全部に罪をかぶせてしまうことだけでは具合が悪いと思います……。

大岡 軍隊の組織自体にかぶせてしまうのはどうか……。もつとも昔からいい軍隊が歴史にあるでしょう。カルタゴ戦争頃のローマの軍隊、大革命からナポレオン初期のフランスの軍隊、それから近くはソヴィエトの軍隊、つまり共和国の軍隊が一番よくって強いと思うんですが、アメリカの軍隊は僕の見え方では一種特別の軍隊ですね。とにかく金があつて楽にやっています。アメリカ市民を戦争に狩り出すためには、装備と待遇を完全にしなければいけないらしい。それに比べればイギリスやフランスの兵隊は苦勞している。日本はもう全然ひどいもんです。西郷さんのつくった封建的な軍隊のままでしたからね。農民を引っぱって来て字や、もののいい方から教

えてつくった。晩の点呼のとき、週番下士官が中隊の入口から「点呼ッ」って変な声でどなるでしょう。あれはじつに封建的な声だと思っただね。(笑)

野間 あれはたしかに昔の伝統ですね。(笑)

大岡 徳川時代の声ですよ。(笑) こいつはいけねえと思いましたね。(笑)

野間 日本はあれで戦争をやるんですね。アメリカはそれに代るに物質を動かしてやっていたと思うんですけど……。

軍隊の残虐性

野間 例えばそれはどうか……いま『日本の貞操』という書物がずっと出ているんですね。

この書物の書き方にはいろいろ問題がありますが、ああいうのを読むと、日本の兵隊が中国でやってきたのと違うんですけど、非常に似ている面もあるんですねですよ。

大岡 その本、僕は読んでないんですが。

野間 例えば女と犬とを関係させてみたり、そういうやり方をするんですね。そういう点だと日本と必ずしも似てないとはいえない。ただ違う面は、例えば三人の兵隊で一人の女を買いきるでしょう。そして、その一人をとことんまでもてあそぶ、安くつくから。しかし、日本の兵隊だったらそういうことはないでしょう。日本の兵隊は金をださずに強力でやったが、やり方が少し違う。

大岡 本なんかで見ると外国人の性習慣は日本人と比べて乱暴なようです。その『日本の貞操』に書かれたようなことが、激しくなったのは、朝鮮戦争からじゃないんですか。

野間 戦争が終りに来てからでしょうね。

編集部 つまり征服したからああいう関係になるんじゃないですか。人種観みたいなものが相当あるんじゃないですか。つまり征服者と被征服者の関係の中でだんだんそういうことが行われて、人種の蔑視のようなものが相当強くあったかどうか……。大岡さん、日本人のフィリピン人に対するものはどうでしたか。

大岡 それは無論同じだったでしょう。最初のほうはうわさ話だけしか知らないんですが、本間中将の方針で滅茶苦茶をやってはいけないということになってたらしい。それでも僕のいたミンドロ島のサンホセなんて田舎でも、戦争初期に來た中隊は住民をグリラの疑いで十五人殺したそうです。ところがその十二人までは、ミステイクだったと町の医者がいつてました。

野間 最初比島へ上陸したときはじつにきびしく取り締まっていた。兵隊は中国でやってきたようなことができないのでブツブツ言っていた。しかし、それはちょっと取り締りがなくなれば、バクハツする。僕の考えでは軍隊を統率していく仕方ですね。それはその軍隊をもつ権力の内容によって違うと思う。軍隊をつくり、それによって兵隊を機械視するということか——これは『裸者と死者』にも兵隊を機械として将軍が見ていると書いてありますが、アメリカの将軍が機械として見るのと、日本の将軍が機械として見るのでは違う機械でしょうけど、やはり同じようにやっているわけです。帝国主義の軍隊はするように兵隊を機械として見、つくりあげる。そういうもの